

墨家集團の質的變化

— 說話類の意味するもの —

淺野裕 一

序言

墨家が鉅子の統率の下、強固な組織的集團を維持し續けた點は、他の諸學派に類例を見ない現象として、常に注目されてきた。そして、この極めて特異な性格の中にこそ、墨家の起源や本質を解き明かす鍵が秘められているのではないかと、盛んに論究が重ねられてもきたのである。しかし、概してこれらの研究は、墨家が既に強固な集團的結合を構築し終えた後の形態を以て、當初よりの一貫した姿と見做しがちではなかつたらうか。そこで小論では、『墨子』說話類と他の諸資料とを比較・検討する手段により、果たして墨家集團の形態が、活動の全期間を通して終始不變であつたか否かを再考すると共に、併せて墨家の起源や思想の性格に對しても、若干の考察を試みることにしたい。

『墨子』中の耕柱・貴義・公孟・魯問四篇の内容は、總て學派の開祖たる墨翟の言行録で、それは丁度、儒家に於ける『論語』に相當すべき性質の資料である。本章では、これら說話類四篇を中心資料とし

墨家集團の質的變化

て、そこに描かれる墨翟時代の學園形態を見てみる。⁽¹⁾

先ず墨翟當時、學園に入門してきた弟子達の意識水準は、如何なる程度のものであつたらうか。

(1) 有游於子墨子之門者、子墨子曰、盍學乎、對曰、吾族人無學者、

子墨子曰、不然、夫好美者、豈曰吾族人莫之好故不好哉、夫欲富貴者、豈曰我族人莫之欲故不欲哉、好美欲富貴者、不視人、猶強爲之、夫義天下之大器也、何以視人、必強爲之(公孟篇)

(2) 有游於子墨子之門者、身體強良、思慮徇通、欲使隨而學、子墨子曰、姑學乎、吾將仕子、勸於善言而學期年、而責仕於子墨子、子墨子曰、不仕子、子亦聞夫魯語乎、魯有昆弟五人者、其父死、其長子嗜酒而不葬、其四弟曰、子與我葬、當爲子沽酒、勸於善言而葬、已葬而責酒於其四弟、四弟曰、吾未豫子酒矣、子葬子父、我葬吾父、豈獨吾父哉、子不葬則人將笑子、故勸子葬也、今子爲義、我亦爲義、豈獨我義也哉、子不學則人將笑子、故勸子於學(公孟篇)

(3) 有游於子墨子之門者、謂子墨子曰、先生以鬼神爲明知、能爲人禍福哉、爲善者富之、爲暴者禍之、今吾事先生久矣、而福不至、意者先生之言、有不善乎、鬼神不明乎、我何故不得福也、子墨子

曰、雖子不得福、吾言何遽不吉、而鬼神何遽不明、子亦聞乎、匿刑徒之有刑乎、對曰、未之得聞也、子墨子曰、今有人於此、什子、子能什譽之、而一自譽乎、對曰、不能、有人於此、百子、子能終身譽其善、而子無一乎、對曰、不能、子墨子曰、匿一人者猶有罪、今子所匿者、若此其多、將有厚罪者也、何福之求(公孟篇)資料(1)には、學團に籍を置きながらも、全く勉學の氣配を見せぬばかりか、墨翟の説諭に對し、「吾が族人に學ぶ者無し」などと應じて憚らぬ、怠惰な弟子の行狀が記される。(2)も同様で、素質を見込まれた弟子ですら、墨翟の仕官話につられてや々と學び出すが、一年経つや否や、すぐさま師に仕官の約束履行を迫る有様である。更に(3)に至つては、鬼神の賞罰を説く教えに勧誘され、久しく師事したにもかかわらず、一向に福を得ぬのは何故か、と弟子が墨翟を詰問し、「意うに、先生の言、善からざること有るか、鬼神の不明なるか」とまで、墨翟へのあからさまな不信の念を表明している。

要するにかかる狀況は、團員の入門動機が、何よりも祿位の獲得と云つた功利追求にあつたことを、如實に示すものに他ならない。この點はまた、「魯人に子墨子に因りて、其の子を學ばしめし者有り。其の子戰いて死す。其の父、子墨子を讓む」(魯問篇)と、我が子が仕官先で戦死したことを抗議する父親の例に見られる如く、單に門人のみならず、學團に子弟を送り出す父兄の側の意識でもあつた。従つて、前記の如く、門人の勉學意欲は極めて低く、當然のことながら、墨家思想自體への傾倒度も、全く稀薄な段階に止まつてゐる。前掲の諸例以外にも、數名の門弟が射を學びたいと申し出、墨翟に「豈に能く學を成し、又た射を成さんや」(公孟篇)とたしなめられるなど、總じて成員の目的意識と、學團を創設した墨翟の意圖との間には、相當の懸

隔が存在している。

かかる傾向は、門弟達が學團で一應の修養を積み、諸國へ仕官した後も、依然として變ることがない。

(4)子墨子仕人於衛、所仕者至而反、子墨子曰、何故反、對曰、與我言而不當、曰、待女以千盆、授我五百盆、故去之也、子墨子曰、授子過千盆、則子去之乎、對曰、不去、子墨子曰、然則非爲其不當也、爲其寡也(實義篇)

(5)子墨子出曹公子而於宋、三年而反、睹子墨子曰、始吾游於子之門、短褐之衣、藜藿之羹、朝得之則夕弗得、祭祀鬼神、今而以夫子之教、家厚於始也、有家享、謹祭祀鬼神、然而人徒多死、六畜不蕃、身湛於病、吾未知夫子之道之可用也、子墨子曰、不然、夫鬼神之所欲於人者多、欲人之處高爵祿則以讓賢也、多財則以分貧也、夫鬼神豈唯攫黍拊肺之爲欲哉、今子處高爵祿而不以讓賢、一不祥也、多財而不以分貧、二不祥也、今子事鬼神、唯祭而已矣、而曰病何自至哉、是猶百門而閉一門焉、曰盜何從入、若是而求百福於鬼神、豈可哉(魯問篇)

(6)子墨子使勝綽事項子牛、項子牛三侵魯地、而勝綽三從、子墨子聞之、使高孫子請而退之、曰、我使綽也、將以濟驕而正娶也、今綽也祿厚而謫夫子、夫子三侵魯而綽三從、是鼓鞭於馬斬也、翟聞之、言義而弗行、是犯明也、綽非弗之知也、祿勝義也(魯問篇)

(7)後世有反子墨子而反者、曰、我豈有罪哉、吾反後、子墨子曰、是猶三軍北、失後之人求賞也(耕柱篇)

先ず(4)には、衛に仕官させた門人が、實際の祿高が初めの約束より少い點を不満とし、墨翟の許可を得ぬまま、勝手に衛を退去してきた事件が記される。次の(5)では、宋に三年仕えた門人曹公子が、教義を忠

実に實踐した結果、入門當初に比べ確かに富裕になりはしたが、一方で災いも相次いでいると不平を述べ立て、「吾れ未だ夫子の道の用う可きやを知らず」と、墨翟への疑念を露わにしている。また(6)は、齊の項子牛に仕官した門人勝綽が、非攻を實踐するどころか、逆に項子牛の對魯侵攻に三度も從軍し、それを學園への背信行爲と見なした墨翟が、高孫子を派遣して勝綽の罷免を畫策したことを傳える。更に(7)では、指令に背いて無斷で歸還した弟子が、他の門人達よりも遅れて離脱した點を盾に、「我れ豈に罪有らんや」と、墨翟に平然と抗辯する始末である。

これらの諸例は、墨翟の努力にもかかわらず、團員に對する教化が容易にその實を擧げ得なかつた狀況を端的に物語る。門人達の意識は、相變らず、學園を踏み臺にして獲得した祿位の側にのみ集中し、彼等の言動からは、墨家思想を實踐せんとする熱情は、ほとんど窺うことができない。まさしく「祿の義に勝つ」(魯問篇) 功利主義的風潮が、學園全體を支配していたと言える。耕柱篇には、衛に仕官した高石子が、衛君が自己の進言を實行せぬとして、高位厚祿を放棄して辭去してきた事件が記される。これなどは、よほど例外的な部類であつたと見え、大いに喜んだ墨翟は、「之を去るに苟に道あらば、狂を受くるも何ぞ傷まん」と彼を勵まし、「夫れ義に倍きて祿に郷う者は、我れ常に之を聞けり。祿に倍きて義に郷う者は、高石子に之を見たり」とまで絶賛している。墨翟は「子爲之、有狂疾」(耕柱篇)と、巫馬子から義の實踐に於ける狂疾の風を指摘されているが、數多い門人達の中、狂を以て義を實踐したとされるのが、僅かにこの高石子唯一人である點に、逆に當時の墨家集團の一般的傾向が窺えるであらう。

こうした現狀を承けて、必然的に墨翟は、門弟の質的強化と云つた

墨家集團の質的變化

難間に對處せざるを得ない。或る場合は叱責・非難(1)(4)(6)(7)したかと思えば、一方では仕官の甘言で誘導(2)し、後にそれは全くの方便であつたと突き放してみたり、更には詭辯に近い言辭を弄して疑惑を封ずる(3)(5)など、様々な對應の中に、墨翟の苦慮の程が偲ばれる。このように墨翟は、正面から教育する以外に、しばしば巧猾な便法を驅使する事態を餘儀なくされているが、それは、既に述べた門人達の不實な言動と相俟つて、學園内に於ける鉅子の權威が、未だ絶對的に確立されていなかった狀況を傳えている。墨翟が病を得た際、跌宕なる弟子が進み出て、先生は日頃鬼神の賞罰を力説するが、その先生自身なぜ病氣になつたりするのか、教えが誤っていたのか、それとも鬼神が不明なのか、と不信の目を向け(公孟篇)ている。例によつて墨翟は、病氣の原因は他にも色々ある、などと苦しい答辯で切り抜けようとするが、この師弟間のやりとりの中にも、當時の墨翟の權威が如何なるものであつたかは、察するに餘りあらう。

學園内部に於ける墨翟の權威と同様、墨家思想もまた、當時の中國世界に於て、確固たる勢力を築くまでには至っていない。墨翟は、「今の士の身を用うるや、商人の一布を用うるの慎に若かざるなり」(貴義篇)「今、士は坐して義を言う。(中略)商人の察に若かざるなり」(同)と、士の言行が商人にも及ばぬことを憂え、「天下の士君子は仁を知らず」(同)「世の君子、其の義の成らんことを欲するも、之を助け、其の身を修めしめんとすれば、則ち慍る」(同)等と、自己の思想が容易に爲政者の同調を得られぬ現狀を、しきりに慨嘆する。内にあつては、勉學意欲に缺け、背信行爲さえ辭さぬ門弟を多數抱え込み、外に向つては、己れの主張を受け容れぬ世を憤りつつ、日夜惡戰苦闘する墨翟の姿は、かなり悲慘と言わなければならぬ。だが、それこ

それは、春秋末の墨家集團の偽らざる實態であつた。「吾が言は用うるに足る。吾が言を捨て、思を革むる者は、是れ猶お獲を捨てて粟を糠うがごとし。他言を以て吾が言を非とする者は、是れ猶お卵を以て石に投ずるがごとし。天下の卵を盡くすも、其の石は猶お毀つ可からざるがごときなり」(貴義篇)との、ヒステリックとも思える口調には、荒野に叫ぶ者の悲哀と孤立感とが漂っている。兼愛の戰士を育成し、以て亂世を救わんとする墨翟の理想は、なお遙かに遠い道程を残していたのである。

二

前章では説話類四篇に據つて、墨翟時代の墨家集團の形態を考察した。引き續き本章では、主に『墨子』以外の周邊資料から、墨翟以降の墨家の姿を見て行くこととした。

墨者鉅子孟勝、善荆之陽城君、陽城君令守於國、毀墳以爲符、約曰、符合聽之、荆王薨、羣臣攻吳起、兵於喪所、陽城君與焉、荆罪之、陽城君走、荆收其國、孟勝曰、受人之國、與之有符、今不見符、而力不能禁、不能死、不可、其弟子徐弱諫孟勝曰、死而有益陽城君、死之可矣、無益也而絕墨者於世、不可、孟勝曰、不然、吾於陽城君也、非師則友也、非友則臣也、不死、自今以來、求嚴師必不於墨者矣、求賢友必不於墨者矣、求良臣必不於墨者矣、死之所以行墨者之義而繼其業者也、我將屬鉅子於宋之田襄子、田襄子賢者也、何患墨者之絕世也、徐弱曰、若夫子之言、弱請先死以除路、還殺頭前於孟勝、因使二人傳鉅子於田襄子、孟勝死、弟子死之者百八十、二人以致令於田襄子、欲反死孟勝於荆、田襄子止之曰、孟子已傳鉅子於我矣、當聽、遂反死之、墨者以爲不聽、鉅

子不察(『呂氏春秋』上德篇)

「貴人をして往きて廣虚の地を實たさしむ」(『呂氏春秋』貴卒篇)とか、「封君の子孫は三世にして爵祿を收め、百吏の祿秩を絶滅し、不急の枝官を損し、以て選鍊の士を奉ぜしむ」(『韓非子』和氏篇)等と云つた、吳起の中央集權強化策に不満を募らせてきた封建貴族達は、紀元前三八一年、悼王の死を契機に一齊蜂起し、官中で吳起を暗殺する。だが、次いで即位した肅王は、吳起殺害に加擔した貴族全員を處罰する方針を取り、その一員であつた陽城君は出奔する。かねて陽城君と親交を結び、彼の采邑防衛を委託されていた鉅子孟勝は、墨家集團を率いて采邑沒收に侵攻してきた楚王の直轄軍と戦うが、遂に城を守り切れずに敗退する。この時、鉅子孟勝は、陽城君に對する契約不履行の責任を負い、集團自決せんことを提案する。弟子の徐弱は、それでは墨者が絶滅し、墨家の理念もまた消滅してしまふと諫言するが、死を以て購う行爲こそ、墨家の信用を守り、墨家の事業を後世に存續させる唯一の方策である、との孟勝の説得の前に、自説を撤回し、率先して自刎する。宋の田襄子に鉅子の讓位を傳える使者として、二人の墨者が旅立ち、残つた墨者百八十人は全員自決して果てる。宋に辿り着いた二人の使者は、田襄子に事の經緯を告げ終ると、田襄子の制止を振り切つて楚に歸還し、皆の後を追つて自決する。以上が、上德篇が傳える事件の概略である。

ここに登場する孟勝は、墨翟・禽滑釐に次ぐ三代目の鉅子と推定される。注目すべきは、墨家の團員百八十人が、鉅子の指示に従い、肅然と死を選択している點である。ここに描かれる墨者の姿には、防禦戰鬪に携つた全員が敗北の責めを負つて自決することにより、墨家の信用と理念とを守り抜こうとする、烈しい使命感が溢れている。

「夫子の言の若ければ、弱請う、先ず死して以て路を除かん」と、異議を取り下げ、率先して範を示した徐弱にせよ、使者の役目を終えた後、事件に關與した者が僅かでも生き残っては墨家の信用を失墜せせると考え、わざわざ陽城に戻って自決した二人の墨者にせよ、そこに見られるのは、あくまで墨家集團の理念に殉ぜんとする、純粹な忠誠心である。

それでは續いて、『呂氏春秋』去私篇が伝える墨家集團の狀況を掲げてみる。

墨者有鉅子腹皞、居秦、其子殺人、秦惠王曰、先生之年長矣、非有它子也、寡人已令吏弗誅矣、先生之以此聽寡人也、腹皞對曰、墨者之法曰、殺人者死、傷人者刑、此所以禁殺傷人也、夫禁殺傷人者、天下之大義也、王雖爲之賜、而令吏弗誅、腹皞不可不行墨者之法、不許惠王、而遂殺之

惠王（在位・前三三七―前三二五年）の治世、秦に居住していた墨家の鉅子腹皞は、我が子の殺人罪を赦さんとする惠王の申し出を斷り、代りに「墨者之法」に據つて息子を處刑する。この「墨者之法」は、腹皞自身が述べる如く、「人を殺傷するを禁せん」とする「天下之大義」に基づいて制定されたもので、これにより當時の墨家集團が、墨家思想を實踐するための戒律を定め、それを集團内で嚴格に施行していた狀況を知ることができる。

次に、『莊子』天下篇が評する戰國末の墨家の様子を示して置く。

墨子稱道曰、昔者禹之漚洪水、決江河、而通四夷九州也、名山三百、支川三千、小者無數、禹親自操耒耜、而九雜天下之川、腓無腓、脛無毛、沐甚風、櫛疾雨、置萬國、禹大聖也、而形勞天下也如此、使後世之墨者、多以裘褐爲衣、以跂踰爲履、日夜不休、以

墨家集團の質的變化

自苦爲極、曰、不能如此、非禹之道也、不足謂墨、（中略）將使後世之墨者、必自苦以腓無腓、脛無毛、相進而已矣

ここに描寫される「後世之墨者」の行狀は、「多く裘褐を以て衣と爲し、跂踰を以て履と爲し、日夜休わず、自ら苦しむを以て極と爲す」「必ず自ら苦しみて、以て腓に腓無く、脛に毛無し」等と、進んで激しい勞働に身を挺し、「此の如くすること能わざれば、禹の道に非ず、墨と謂うに足らず」と稱しつつ、ひたすら墨家思想の實踐に勵む、純粹な思想の徒そのものと言える。

さて、以上紹介してきた資料と、第一章に於て解説した説話類四篇の内容とを對比するとき、兩者の間の餘りにも甚だしい懸隔に驚かされるであろう。孟勝指揮下の墨者百八十人が集團自決した事件からは、墨翟當時の怠惰で不誠實な、祿位のみを重視する門弟の面影は、微塵も見出すことができない。これは、開祖墨翟の時代から三代目の鉅子孟勝に至るまでの間に、墨家が果たしてこれが同一の集團であろうかと疑わせる程に、思想集團としての純粹度を飛躍的に向上させたことを意味する。このように、當初に較べ墨者の思想的意識が格段に尖鋭化した點は、やはり『莊子』天下篇が記す、質素な生活に甘んじつつ、ひたむきに刻苦勉勵する「後世之墨者」の姿によつても、充分確認することができる。今や墨者は、彼等の過激・狂疾なまでの實踐活動と、超俗的な自己犠牲の精神とによつて、その特色が記録される程に、大きな質的變化を遂げたのである。⁽²⁾

こうした思想的尖鋭化と共に、鉅子の權威もまた、墨翟當時より遙かに強化されている。前述した『呂氏春秋』去私篇の記載が明示する如く、鉅子は「墨者之法」によつて集團内を強力に統率し、我が子すら處刑する程に、團員に對する生殺與奪の權を掌握するに至つたので

ある。この他、『莊子』天下篇が「巨子を以て聖人と爲し、皆之れが尸と爲らんことを願ひ、其の後世爲らんことを冀う」と記すことも、墨家集團内に於ける鉅子の權威が、既に絶對的な地位を確立していた状況を裏付けている。かつて、門人達から面と向つて不信疑惑の言を投げかけられ、團員の統制に苦慮していた墨翟當時とは、まさしく雲泥の差と言える。

それでは、このような墨家集團の著しい質的變化は、いったい何によつてもたらされたのであろうか。前掲の資料中、『莊子』天下篇の内容は、戰國後期から戰國末の狀態を記録したものと推定され、『呂氏春秋』去私篇は、紀元前四世紀後半、戰國中期の事件を記したものである。そして、『呂氏春秋』上德篇が記すのは、紀元前三八一年に起つた事件である。従つて、前述した墨家集團の顯著な質的變化は、既に三代目の鉅子孟勝の時代までには遂げられていたことが明白である。

とすれば、それは主に二代目の鉅子、禽滑釐の時代に行われたと見なければならぬ。禽滑釐は、「墨翟禽滑釐聞其風而説之」「墨翟禽滑釐之意則是」(『莊子』天下篇)と、墨翟と連稱される點や、『墨子』耕柱篇に於て、「子墨子説而召子禽子曰」と記されることから、墨翟が特に信頼していた高弟であつたことが知られる。故に、墨翟の後、二代目の鉅子を繼いだのが禽滑釐であつた點は確實である。この禽滑釐は、『墨子』備城門篇以下の兵技巧諸篇に於て、「禽滑釐問於子墨子曰、(中略)吾欲守小國、爲之奈何」(備城門篇)「禽子再拜、再拜曰、敢問守道」(備梯篇)などと、墨翟から守城術を傳授されており、とりわけ防禦部隊の育成による非攻活動の實踐に熱情を注いだ人物と目される。このように、禽滑釐が防禦戰闘に中心的役割を果たしたことは、

必然的に彼の團員に對する統率力を強化する方向に機能したであろう。戰時に際しては、平時よりも鉅子の權限が一段と強化され、團員はその命令を軍律として受け留め、それに絶對的に服従することが要求されるからである。こうした要因が、墨翟時代からの教化の蓄積や組織の整備と相俟つて、漸く彼の時代に至り、團員の思想的純化と鉅子の權威確立をもたらしたものと考えられる。墨門への入團動機は、依然として仕官による祿位獲得にあつたであろうが、一旦入團した後は、急速に墨者としての自覺を植え付けるだけの教化體制が、この時期に構成された譯である。これによつて墨家集團は、墨翟當時の功利的風潮を拂拭し、眞に思想集團と呼ぶにふさわしい成長を遂げることが可能となつたのである。前掲の『呂氏春秋』上德篇・去私篇、及び『莊子』天下篇に敘述される、強固な集團的結束と獻身的な墨者の姿とは、まさしくその成果に他ならない。

三

これまで『墨子』説話類四篇を、墨翟時代の資料と見る前提に立つて論を進めてきたが、従来の墨家思想研究に於ては、これら説話類が必ずしも充分に活用されてきたとは言ひ難い。その最大の原因は、これら四篇の成立時期について、果たしてそれを墨翟時代の資料と見做し得るか否か、との不安が残されていたためであろう。そこで本章では、前に判明した墨家集團の質的變化などを手懸りに、改めて説話類四篇の成立時期について検討してみる。

既に前章までの論述によつて明らかな如く、説話類が記す墨翟時代の學團の狀態と、『呂氏春秋』や『莊子』が示す三代目の鉅子以降の學團の狀態との間には、顯著な質的相違が見られる。もし説話類四篇

が、鉅子の絶對的權威が確立され、墨者の學派意識もまた極めて尖鋭化した後になって、開祖墨翟に託して言わば附會されたものであるとすれば、そこには威嚴に満ちた鉅子と自己犠牲の精神に燃える墨者の姿とが描かれる筈であって、その内容は、決して第一章で解説したような性格を示さぬであらう。従って、説話類四篇が記す、勉學意欲に缺け、墨翟に平然と不信の目を向け、祿位の前に背信を繰返す門人達の有様は、まさしく墨翟による學團創設の頃の記録としなければならぬ。

また説話類四篇に登場する墨家の活動地域も、やはりそれが墨翟時代の状況を伝える資料であることを裏付ける。「子墨子自魯即齊」(貴義篇)「魯君謂子墨子曰、吾恐齊之攻我也」(魯問篇)「魯君謂子墨子曰、我有三子」(同)「魯之南鄙人、有吳慮者、(中略)子墨子聞而見之」(同)等の記述から、墨家集團の本據は魯の國內に存在したと思われる。この點は、「子墨子北之齊、(中略)至淄水不遂而反焉」(貴義篇)と、齊を北方と表現する一方、「子墨子南游於楚」(貴義篇)「子墨子南游使衛」(同)と、衛や楚を南方とする地理關係からも首肯し得るであらう。そして、學團からの仕官先、及び墨翟の遊説先を見ると、以下の如くである。

- (1) 子墨子游耕柱子於楚、(中略)二三子復於子墨子曰、耕柱子處楚無益矣(耕柱篇)
- (2) 子墨子使管黔敖、游高石子於衛(同)
- (3) 子墨子謂魯陽文君曰(同)
- (4) 子墨子南游於楚、見楚獻惠王、獻惠王以老辭、使穆賀見子墨子(貴義篇)
- (5) 子墨子南游使衛(同)

墨家集團の質的變化

- (6) 子墨子謂公良桓子曰、衛小國也、處於齊晉之間、猶貧家之處於富家之間(同)

- (7) 子墨子仕人於衛、所仕者至而反(同)

- (8) 齊將伐魯、子墨子謂項子牛曰、伐魯、齊之大過也(魯問篇)

- (9) 子墨子見齊大王曰(同)

- (10) 魯陽文君將攻鄭、子墨子聞而止之(同)

- (11) 子墨子游公尙過於越、公尙過說越王、(中略)以迎子墨子於魯(同)

- (12) 子墨子出曹公子而於宋(同)
- (13) 子墨子使勝綽事項子牛(同)

以上の資料によれば、墨家集團の活動地域は、魯を根據地として、齊(8)(9)(13)、衛(2)(5)(6)(7)、宋(12)、魯陽・楚(1)(3)(4)(10)、越(11)、等の領域に互っている。注目すべきは、これらの中に、北方の燕と西方の三晉や秦が全く含まれていない點である。ところが後代の資料では、「墨者に鉅子腹醇有り。秦に居る」(「呂氏春秋」去私篇)「墨者に田鳩有り。秦の惠王に見えんと欲す」(同・首時篇)「東方の墨者謝子、將に西のかた秦の惠王に見えんとす」(同・察微篇)等と、國際政治に於ける秦の影響力増大を反映して、戰國中期以降、多數の墨者が秦で活動した狀況が記されるようになる。また「司馬喜、墨者師を中山王の前に難するに非攻を以てす」(「呂氏春秋」應言篇)と、墨者は北方の中山に於ても、燕に對する攻撃を中止するよう遊説活動を行っており、更に「代君墨を爲して殘せらる」(「淮南子」人間訓)と、趙の北邊で活動した形跡も存在する。まさしく、「楊朱墨翟の言、天下に盈つ」(「孟子」滕文公下篇)「孔墨の弟子徒屬、天下に充滿す」(「呂氏春秋」有度篇)との盛況を呈した譯である。従って、説話類が記す墨家の活動範圍と、戰國中期以降の狀況とを比較する時、そこには明らかな時代差を讀み取ること

ができる。とすれば、この點もやはり説話類四篇が、墨家の足跡が未だ燕・晉・秦等に及んでいなかった墨翟時代の資料であることを證明するであらう。

それでは次に、説話類が扱う時期的範圍に視點を移して、この問題を考えてみよう。魯問篇には、「昔者吳王東伐越、(中略)是以國爲虛、身爲刑戮」と、前四七二年の吳の滅亡と、前四五三年の智伯氏の滅亡とが、いずれも過去の事件として語られる。従つて説話類の成立時期は、前四五三年以降としなければならぬ。墨翟と同時代の出來事としては、貴義篇に墨翟が楚の獻惠王に會見を申し込んだことが記される。蘇輿はこの楚王を、前五一九年から前四三二年まで在位した惠王を指すと解し、孫詒讓は『渚宮舊事』注に當時惠王は已に在位五十年に及んでいたとあることから、これを周考王二年・魯悼公二十九年の事と推定している。この説に従えば、墨翟が惠王に會見しようとして拒絶されたのは、前四三九年の出來事となる。

また魯問篇には、「子墨子見齊大王曰」と、墨翟が齊の太公田和と會見した記事が見える。太公田和が齊侯として即位したのは、前四〇九年である。故にこの一件は、前四〇九年から數年を経た後と考えられる。とすれば、説話類が墨翟と同時代としているのは、前四三九年前後から前四〇九年を少し降るまでの間、即ち前五世紀後半となる。

魯問篇は、「公尙過說越王、越王大說、謂公尙過曰、先生苟能使子墨子於越、而教寡人、請裂故吳之地、方五百里、以封子墨子」と、墨翟の時代、吳を併合した越が未だ強盛を保っていた状況を記す。更に魯問篇は、「楚之兵節、越之兵不節、楚人因此若斲、亟敗越人、公輸子善其巧、以語子墨子曰」と、墨翟當時、楚越の抗争が激しく繼續中

であつたことを傳える。吳を破つて強盛を誇つた越も、やがて勢力を失ひ、前三三四年までに完全に楚の併合する所となるため、上述の點も、やはり前五世紀後半の歴史状況と、最も良く合致するものである。

この他、「子夏之徒、問於子墨子曰」(耕柱篇)「巫馬子謂子墨子曰、子兼愛天下」(同)「公孟子曰、君子不作術而已」(同)と、墨翟が子夏の門人や、孔子の弟子巫馬期の子と推測される巫馬子、曾子の弟子の公孟子高等と問答を交したとされる點も、同じく春秋末の時代状況と符合する。説話類に於ては、非攻に關し、楚の公輸盤による宋國侵攻や、齊の項子牛による魯國侵攻、魯陽の文君による鄭國攻撃などが、しばしば登場してくるが、これらが主要な關心事として扱われる點も、自ずと春秋末の情勢を反映している。

要するに説話類四篇は、その總てが前五世紀後半の一定した時期を指示しており、そこに後代の資料が混入したことを疑わせるような、不自然な形跡は全く存在しない。このように、説話類全體が極めて安定した性格を示す以上、時期的範圍の視點からも、説話類四篇は墨翟と同時代の資料と判斷することができる。

これまで本章では、墨家集團の質的變化、墨家の活動地域の擴大、扱われる時期的範圍、と云つた三點との對應關係を手懸りに、説話類四篇の成立時期について検討してきた。その結果、いずれの視點からも、これら四篇を墨翟時代の資料と見做し得る、との結論を得た譯である。耕柱篇では「子墨子說而召子禽子」と、墨翟の門人中、禽滑釐だけが「子禽子」と表記されており、この點からすると、説話類は、墨翟時代の記録を次の鉅子禽滑釐の時期にまとめたものと思われる。従つてこれら四篇の内容は、墨翟時代の學團の状況をほぼ忠實に傳えていると考えてよいであらう。

四

前章までの論述により、説話類四篇が開祖墨翟時代の状況を伝える資料であることを確認し得た。そしてこの點を踏まえるならば、墨家集團の起源や墨家思想の性格に對しても、幾つかの新たな知見を加えることが可能となる。

その第一は、墨家が既に何らかの強固な同志的結合に支えられていた、特殊な集團を母胎に形成されたのではない點である。従來、墨翟の出自ないし墨家の起源に關しては、周室に祭祀集團として仕えた「清廟之守」とする『漢書』藝文志の説、入墨を受けた刑徒とする錢穆の説、車工の出身とする方授楚の説、工人集團と見る渡邊卓氏の説、任俠的結合と法的強制を習俗規範とする武士團的私黨と見る増淵龍夫氏の説、等々が提出されてきている。これらの説は、いずれも墨家集團の起源を何らかの形で一般人とは異なる特殊な階層に求めようとする點で、大きな共通性を保っている。そしてこうした見解を生ずる根底には、それによつて、墨家が持つ強固な集團的結合の原因を説明せんとする動機が働いていたと思われる。

しかしながら、既に見てきた墨家集團の質的變化の跡を踏まえる時、上記の諸説はことごとく成立し難いであろう。宗教的祭祀集團にせよ、刑徒・賤人の集團にせよ、或いは工匠に率いられた工人集團にせよ、更には仁俠的私黨にせよ、墨家集團の母胎がそうした特殊集團であったとすれば、墨家は既に結成當初から、各々の性向に應じた形で、極めて強い集團的結束を備えていた筈である。ところが前述の如く、墨翟時代の墨家集團は、雑多・不純な成員を抱え、鉅子は彼等の教化・統制に日々心を碎かねばならぬ状態であつて、そこには如何な

墨家集團の質的變化

る形でも、特殊な同志的結合は見出すことができない。もし、墨家の前身が特殊な集團であれば、説話類が記す、こうした學團の状況は、絶對に起こり得ぬであろう。思想集團が通常そうである如く、墨家もまた、意識の低い雑然とした構成員を次第に教化・洗脳して、思想的純粹性と組織的統制とを高めて行く、との一般的發展過程を辿つたのである。

この點に關連して、墨翟個人を一般人以下の賤人とする見解に對し、特に再考を加えて置きたい。貴義篇には、墨翟が楚の獻惠王に會見を申し込んだ際、穆賀が「子之言則成善矣、而君王天下之大王也、毋乃曰賤人之所爲而不用乎」と述べて拒絶したとあり、方授楚や渡邊卓氏はこの點を論據に、墨翟を工匠の出身であろうと推定している。しかしながら、貴義篇で使用される「賤人」の意味については、それを文字通り一般人以下の特殊な身分階層を指すとは解し難い。何故ならば、ここでの「賤人」とは飽くまでも「天下之大王」に對置される呼稱だからである。後文には「今農夫入其稅於大人、大人爲酒醴黍盛、以祭上帝鬼神、豈曰、賤人之所爲而不享哉」とあつて、墨翟は自ら農夫を「賤人」と表現している。故に「賤人」とは、統治階層に屬さぬ者一般を指す總稱と見なければならぬ。この點は更に、「墨子」中の他の用例からも裏付けることができる。

自貴且智者、爲政乎愚且賤者則治、自愚賤者、政乎貴且智者則亂、是以知尙賢之爲政本也(尙賢中篇)

古者舜耕歷山、陶河濱、漁雷澤、堯得之服澤之陽、學以爲天子、與接天下之政、治天下之民、伊摯有辛氏之私臣、親爲庖人、湯得之學以爲己相、(中略)傳說被褐帶索、庸築乎傳巖、武丁得之學以爲三公、(中略)始賤卒貴、始貧卒而富(同)

處大國不攻小國、處大家不寡小家、強者不劫弱、貴者不傲賤、多詐者不欺愚（天志上篇）

義不從愚且賤者出、必自貴且知者出、（中略）夫愚且賤者、不得爲政乎貴且知者、貴且知者、然後得爲政乎愚且賤者（天志中篇）

これらに登場する「賤」は、總て「貴」に對する所の「賤」であつて、とり立てて一般人から區別される特殊な階層を指しているのではない。「賤」と稱される尙賢中篇の舜や伊摯・傅説の前身も、せいぜい貧民と言ふに止まるもので、愚賤より貴智に政を爲し義を發したのでは天下が治まらぬ、との主張からも明らか如く、「墨子」に於ける「賤」とは、貴人に非ざる者、即ち被統治者全般を意味する呼稱に他ならない。この點は、「官無常貴、而民無終賤」（尙賢上篇）と云つた對比からも確認し得る。従つて、墨翟が楚王に比して「賤人」と表現されたからと言つて、墨翟を隸屬的な地位に置かれた工人と見るべき必然性は全くなく、増してや刑徒の類とする根據とは何らなり難いのである。

魯問篇には、墨翟が何故に思想活動を開始するに到つたのか、その動機を自ら述べた發言が記されている。

魯之南鄙人、有吳慮者、冬陶夏耕、自比於舜、子墨子聞而見之、吳慮謂子墨子曰、義耳義耳、焉用言之哉、子墨子曰、子之所謂義者、亦有力以勞人、有財以分人乎、吳慮曰、有、子墨子曰、翟嘗計之矣、翟慮耕而食天下之人矣、盛然後當一農之耕、分諸天下、不能人得一升粟、籍而以爲得一升粟、其不能飽天下之飢者、既可睹矣、翟慮織而衣天下之人矣、盛然後當一婦人之織、分諸天下、不能人得尺布、籍而以爲得尺布、其不能煖天下之寒者、既可睹矣、翟慮被堅執銳、救諸侯之患、盛然後當一夫之戰、一夫之戰、

其不御三軍、既可睹矣、翟以爲不若誦先王之道、而求其說、通聖人之言、而察其辭、上說王公大人、次說匹夫徒步之士、王公大人用吾言、國必治、匹夫徒步之士用吾言、行必脩

吳慮は不言力行を唱え、言説に頼らんとする墨翟の思想活動を批判する。これに對し墨翟は、かつては己れも自ら耕し、自ら織り、自ら武器を取つて、天下の危急を救濟せんとしたが、個人の努力には限界があることを悟り、「先王の道を誦して、其の説を求め、聖人の言に通じて、其の辭を察するに若かず」と、思想的教化の方針に轉じた、と述べる。こうした墨翟の述懐は、「今夫子載書甚多、何有也」（貴義篇）と、日頃實踐を強調するにもかかわらず、墨翟の藏書が膨大なのを故唐子が怪しんだとの記述と共に、彼がもともと相當な知識人であつたことを示しており、「堅を被り銳を執りて、諸侯の患を救わん」としたとの敘述や、守禦戰術に精通していた點からして、墨翟は下級武士の出身ではなかつたかと想像される。墨家自身は、墨翟の出身をこのように傳承していたのであり、この點からも、墨翟の出身を工匠や刑徒等の特殊な階層に比定すべきでないことが諒解されるであらう。

墨翟個人と同様、墨家集團の構成員もまた、特殊な身分階層に限定されていたとは考えられない。「莊子」列禦寇篇には、次のような記述が見える。

鄭人緩也、呻吟裘氏之地、祗三年而緩爲儒、河潤九里、澤及三族、使其弟墨、儒墨相與辯、其父助翟、十年而緩自殺、其父夢之曰、使而子爲墨者、子也、闔胡嘗視其良、既爲秋柏之實矣

儒者となつた兄が、學資の面倒を見て弟を墨者としたが、兄弟は儒墨の是非を論争するようになり、父親が弟に加擔したため、それを怨んだ兄が自殺した、との内容である。これによれば、同一の家から儒者

と墨者が出ており、儒者と墨家の出身階層には何らの區別も存在しなかつたこととなる。假りに墨家の成員が特殊な身分階層によつて占められ、儒家との間に歴然たる階層差が設けられていたとすれば、こうした話自體、決して作られることがなかつたであろう。とすれば、墨家の場合も、開祖の出自、及び構成員の出身階層共に、孔子の學園とはほど大差ない状態であつたとしなければならず、それ故にこそ、墨翟は入門してきた弟子の思想的純化に、多大の苦心を拂わねばならなかつた譯である。

以上本章では、墨家の起源について考察してきた。その結果、墨家の起源を特殊な集團に求め、それによつて、強固な集團を維持した墨家の特殊性を説明せんとしてきた様々な試みは、いずれも墨家が強固な集團性を構築し終えた後の形態を以て、當初よりの一貫した姿と見做し、上述した墨家集團の質的變化を見落した所に生じた誤解である、との結論を得たのである。

五

説話類四篇を墨翟時代の資料と確認し得たことによつて、新たに判明する第二の點は、十論の成立時代である。

魯問篇には、十論の成立時期を考える上で、極めて重視すべき資料が存在する。

子墨子游魏越、曰、既得見四方之君子、則將先語、子墨子曰、凡入國、必擇務而從事焉、國家昏亂、則語之尚賢尚同、國家貧、則語之節用節葬、國家意音湛洏、則語之非樂非命、國家淫僻無禮、則語之尊天事鬼、國家務奪侵凌、即語之兼愛非攻、故曰擇務而從事焉

墨家集團の質的變化

墨翟は魏越に對し、遊説先の各國の状態に應じ、説くべき内容を選択するよう指示しているが、その發言中には、十論總てが登場してきている。従つて十論の主張自體は、早くも墨翟の時代に、既にその全部が成立していたと見ることが出来る。更に留意すべきは、十論内部が、各々二つずつの計五種に區分されている點である。これによつて墨家自身が、尚賢・尚同、節用・節葬、非樂・非命、天志・明鬼、兼愛・非攻の五グループを、各々類似した目標ないし性格を持つ同種の主張と考へていたことが判る。この點は、十論の思想的性格を考えるに際し、例えば尚賢論と尚同論とが、相互に切り離せない密接な内的連關を保つ、との重要な手懸りを提供するものである。

説話類四篇中、十論全體の名稱がまとまつた形で挙げられるのは、上掲の魯問篇の資料だけであるが、四篇内には、他にも十論の各主張が散見する。先ず尚賢と尚同であるが、魯問篇には、「夫鬼神之所欲於人者多、欲人之處高爵祿、則以讓賢也、(中略)今子處高爵祿、而不以讓賢」と、賢者に祿位を讓るべきことが説かれており、これは、「有能則舉之、高豫之爵、重豫之祿」(尚賢上篇)との尚賢論の主張と一致する。更に貴義篇には、墨翟が衛の公良桓子に向い、「若取節車食馬之費、與繡衣之財、以畜士、必千人有餘、若有患難、則使數百人處於前、數百人於後、與婦人數百人處前後、執安、吾以爲不若畜士之安也」と、冗費を去つて士を養うべきことを説く記述が見える。これもやはり、「若欲衆其國之善射御之士者、必將高之貴之、敬之譽之、然后國之善射御之士、將可得而衆也」(尚賢上篇)と云つた、尚賢思想を踏まえた思考であろう。また魯問篇に於ける墨翟の發言中には、「尚同而無下比、(中略)此翟之所謂忠臣也」との表現が含まれ、「上同而不下比」(尚同上篇)「皆上同乎國君、而不敢下比」(尚同中篇)等の尚同

論の主張と合致している。

次に節用と節葬を見てもよい。公孟篇で墨翟は、「夫知者、必尊天事鬼愛人節用、合焉爲知」と述べ、天志・明鬼・兼愛と共に、節用の名稱を擧げている。この他、前述した衛の公良桓子に對する忠告の中にも、節用の思想が含まれている。一方節葬の主張は、儒家との重大な論争點であつたと見え、「子墨子謂公孟子曰、喪禮君與父母妻後子死、三年喪服、(中略)若用子之言、則君子何日以聽治、庶人何日以從事」(公孟篇)「公孟子謂子墨子曰、子以三年之喪爲非」(同)「公孟子曰、三年之喪、學吾子之慕父母、子墨子曰、夫嬰兒子之知」(同)「厚葬久喪、重爲棺槨、多爲衣衾、送死若徒、三年哭泣、扶後起、杖後行、耳無聞、目無見、此足以喪天下」(同)等々、公孟子や程子との問答中に多數現われる。

續いて非樂と非命に移ると、この兩者も儒家との争點として、度々登場する。非樂の方は、「古者三代暴王、桀紂幽厲、齷爲聲樂、不顧其民」(公孟篇)「子墨子問於儒者曰、何故爲樂」(同)「弦歌鼓舞、習爲聲樂、此足以喪天下」(同)等と見え、また非命の側も、「子墨子曰、教人學而執有命、是猶命人葆、而去其冠也」(公孟篇)「以命爲有、貧富壽夭、治亂安危、有極矣、不可損益也、(中略)此足以喪天下」(同)と説かれている。

殘る天志・明鬼・兼愛・非攻については、「夫知者、必尊天事鬼愛人節用」(公孟篇)「子墨子曰、古聖王、皆以鬼神爲神明」(同)「儒以天爲不明、以鬼爲不神」(同)「尊天事鬼愛人、甚不仁獨愈於亡也」(同)とか、「吾願主君之上者尊天事鬼、下者愛利百姓」(魯問篇)「巫馬子謂子墨子曰、子兼愛天下」(耕柱篇)等と、天志・明鬼・兼愛が唱えられ、非攻もまた、「大國之攻小國、譬猶童子之爲馬也」(耕柱篇)「伐魯、齊

之大過也」(魯問篇)「今擧兵將以攻鄭、天誅其不至乎」(同)等と、隨所に頻出する。

以上觀てきた如く、説話類四篇中には、十論の主張がごとごとく含まれている。説話類全體が墨翟時代の狀況を忠實に傳える資料であることは、既に第三章までの論述によつて確認された所であり、これら十論に觸れる部分のみを後代の竄入・附會とすべき根據が何ら存在しない以上、必然的に十論の主張は、開祖墨翟の時代にその總てが成立していたと考えなければならぬ。

從來の墨家思想研究に於ては、十論を相當長期に亙つて順次形成されたものとする見方が往々にして見受けられる。その代表的な例としては、兼愛・非攻の系統を弱者支持の理論、尙同・天志の系統を大帝國を目指す天子專制理論と捉えた上で、當初の兼愛・非攻の系統が表れるにつれて、戰國後期に尙同・天志の系統が興つてきたとする、渡邊卓氏の説が擧げられる。

しかしながら、十論中の兼愛・非攻を弱者支持、尙同・天志を專制理論と規定する根據は、所詮は研究者側の主觀に過ぎない。説話類四篇中に、十論ごとごとく具備している點が明示する如く、墨家自身は、十論全體を全く矛盾することのない、整合的な體系と考えていたのである。従つて、冒頭に解説した魯問篇の記述に於て、同種の主張として組み合わされていた二者の中、最初片側だけが存在し、片側は遙かに遅れて成立したなどは、もとより考え難いのであり、更に目的や性格別に區分されていた五組の中、そのいずれかだけが先に存在し、そのいずれかは遙か後代になつてから、前者と矛盾・對立する主張として提唱されたなど云うことも、決してあり得ないのである。こうした考えは、十論の中、とかく兼愛や非攻のみを高く評價せんと

する先入観に囚われたものであり、説話類四篇の資料的意義を輕視した結果生じた誤解と判断せざるを得ない。¹⁰⁾

しかもこうした所説の論證手段の多くは、上・中・下三篇の表面的な文章表現上の相違を、恰も深刻な質的斷絶であるかの如く擴大して解釋したり、或いは兼愛説の變容ないし衰退の跡を、尙同や天志等、他の主張の内部に求めたりする傾向が強い。しかし、文章表現上の差異は、相手を強力に説得せんとする動機や、反對勢力よりの非難を封ぜんとする要因から生ずる場合が多く、それを以て、直ちに重大な思想的變質と見做すのは、甚だ危険である。ましてや、兼愛説が變容・衰退したとする論據を、他の主張の内部に求めたりする方法は、木に縁りて魚を求むるの感を免れぬであろう。何故なら、尙同や天志と云った最初から目的や性格を異にする篇の内部に、兼愛思想を説く箇所が少いのは當然の現象であつて、それは兼愛説が衰えた根據とは何らなり得ず、また説かれ方が多少異つたとしても、そもそも篇本來の主旨が他に存在する以上、これも當然の現象としなければならぬからである。

筆者の見解によれば、各々表面的論旨を異にする十論も、その根底には、周封建體制より血縁的要素を除去した形で、既存の諸國の保全を圖らんとする、共通の基盤が存在しており、この共通基盤を前提にするならば、十論は相互に緊密な連繫を保ちつつ、全體として整合的體系を構成していると考えられるのである。故に、十論二十三篇が著作された年代には各々差異があるとしても、殊更十論の内部を相對立する幾つかの思想系統に分割しなければならぬ必然性は存在しないのであり、十論を等しく墨翟自身の主張とする説話類四篇の内容は、まさしくこの點を補證するものに他ならない。

結 語

小論では、從來注目されることのなかつた墨家集團の質的變化を中心に、説話類四篇の成立時期を検討し、更にそれを踏まえて、墨家集團の起源や十論の成立時代についても考察を加えてみた。

その結果、墨家集團が發足當初より強固な集團的結束を保持していたのではないこと、説話類四篇が墨翟時代の狀況を傳える資料であること、墨翟が特殊な身分階層の出身ではなく、墨家もまた何らかの特殊な集團を母胎に形成されたのではないこと、十論が墨翟の時代に既に成立していたこと、等々の推論を導き出したのである。

これまで説話類は、資料的信憑性に疑念が残されていたこともあつて、必ずしも積極的に活用されてきたとは言ひ難い。しかし、それは墨家の原初形態を傳える貴重な資料であり、そこには、墨家集團の生態や墨家思想の性格を知る上での重要な記述が多數含まれている。従つて、今後の墨家思想研究に際しては、これらの資料をより一層重視することが必要であらう。

注(1) 以下『墨子』の引用は、孫詒讓『墨子間詁』に據る。『間詁』により字句を改め、また異體字を通行の字體に直した箇所がある。

(2) 「墨子兼愛、摩頂放踵、利天下爲之」(『孟子』盡心上篇)「爲之者役夫之道也、墨子之說也」(『荀子』王霸篇)「墨子服役者百八十人、皆可使赴火蹈刃、死不還踵、化之所致也」(『淮南子』泰族訓)等の評語も、必ずしも墨翟自身のみを指すものではなく、思想的尖鋭化を遂げた後の、戰國期の墨者の生態を踏まえた表現であらう。

(3) 『莊子』天下篇では、墨家が二派に分裂したとされるのに對し、『韓非子』顯學篇では、墨家が三派に分裂した状態が記される。従つて、『莊

- 子」天下篇の著作時期は、『韓非子』顯學篇以前と考えられる。
- (4) 公輸篇では、「公輸盤爲楚造雲梯之械成、將以攻宋、子墨子聞之起於齊、行十日十夜、而至於郢」と、墨翟が齊より出動したと記すが、『問詁』が指摘する如く、『呂氏春秋』愛類篇・「淮南子」修務訓等々他書の引用では、總て魯より出發したとされている。
- (5) 墨元及び孫詒讓の考證に據る。
- (6) 宋翔鳳及び孫詒讓の考證に據る。
- (7) 『先秦諸子繫年』第三十二章「墨翟非姓墨墨爲刑徒之稱攷」。
- (8) 『墨學源流』上卷・第二章「墨子之事蹟」。
- (9) 『古代中國思想の研究』第三部・第二編・第一章「墨家集團の組織と事業」。
- (10) 『中國古代の社會と國家』第一篇・第三章「墨俠」。
- (11) この他、「今賤人也、亦攻其鄰家、殺其人民、取其狗家食糧衣裘、亦書之竹帛、以爲銘於席豆、以遺後世子孫、曰莫若我多、其可乎」(魯問篇)とある「賤人」も、明らかに一般人を指す用法である。
- (12) 馮友蘭『中國哲學史新編』第五章では、墨翟の階層を手工業出身の士と推定している。
- (13) 最近では、大久保隆郎氏「墨家の「墨」と「文身之俗」」(集刊東洋學・39號)が、墨家は吳越の南方文化を背景として興り、墨家の組織も宗教的原始共同體を基盤としていた、との見解を提出している。しかし、學園の本據が魯に存在したことに象徴される如く、墨家思想は中原文化に基づくもので、吳越の文化的傳統とは決定的な斷絶がある。確かに魯問篇には、「子墨子曰、雖中國之俗、亦猶是也、殺其父而賞其子、何以異食其子而賞其父者哉」と、「中國之俗」を非難する内容が見られるが、これも、墨翟自身飽くまでも中國の立場に立つての發言であって、蠻夷の側からする中國への非難とは解し難い。同じく魯問篇には、越王から招聘を受けた際、「抑越王不聽吾言、不用吾道、

- 而吾往焉則是我以義糶也、鉤之羶、亦於中國耳、何必於越哉」との理由から、墨翟がそれを拒絶したことが記される。この彼の發言には、強烈な中華意識が込められており、この点からも、墨家と吳越の蠻夷とを結び付ける見解は、到底成立し得ないであろう。
- (14) 渡邊氏前掲書・第三部・第一編・第二章「十論二十三篇」。
- (15) 兼愛論が中・下篇に到り、爲政者に兼愛を政策として採用せよと主張する點も、格別重大な思想的變質とは見做し難い。墨翟が「國家務奪侵凌、卽語之兼愛非攻」(魯問篇)と述べ、また「上說王公大人、(中略)王公大人用吾言、國必治」(同)と語る如く、もともと墨翟には、自己の言説を統治者に受容せんとする傾向が存在したのであり、兼愛論にも最初から國家の統治者を對象とする側面が含まれていたからである。
- (16) この點については、拙稿「墨家思想の體系的理解(一)兼愛論について」(集刊東洋學・32號)「墨家思想の體系的理解(二)非攻論について」(集刊東洋學・33號)「墨子」尙賢論の特性について」(國學院雜誌・77卷6號)「墨子」尙同論の構造——天子專制理論との對比——」(文化・40卷1・2號)参照。